

# ウイグルの油灯舞

——大谷探検隊が見た「油皿踊」の追跡——

鵜島 三 壽

はじめに

筆者は二〇〇六年から三年間、中国の新疆ウイグル自治区に伝承されているムカーム（木卡姆）の調査に参加した<sup>①</sup>。ムカームとは、ウイグル族の伝統音楽で、さまざまな楽曲によって構成される歌と踊の総称である。これは音楽や舞踊の形態、使用楽器の多様性が特徴で、楽器は弦鳴楽器（撥弦楽器、打弦楽器、擦弦楽器）、気鳴楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器など二〇数種に及ぶ。こうしたことからムカームは、中央ユーラシア最大の合奏音楽とされている。

この調査は、アジア各地の合奏音楽の特徴を比較研究する上での基礎資料の収集が中心であった。筆者はこのときに、ムカームの中に組み込まれている芸能―頭上に碗を五つほど重ねて踊る頂碗舞や鶏のぬいぐるみを着て踊る鶏舞―を見て、散楽との関連に強い興味をいだいた。ここでいう散楽とは、芸術性の高い声楽、器楽、舞楽などではなく、物真似、軽業、曲芸、奇術、幻術、人形戲など娯楽的要素の強い芸能を音楽伴奏で行うものことである。本稿では、こうした芸能と関連を持つものを散楽系芸能と呼ぶこととする。

このときに実見した頂碗舞に関しては、新疆ウイグル自治区における分布状況は、『中国民族民間舞蹈集成 新疆卷』<sup>②</sup>に詳しい。この本は、新疆ウイグル自治区に居住する各民族が伝承する芸能を、市県ごと

に把握できるので便利である。散楽系芸能の中で、頭上にものを載せて踊るものだけをあげても、頂碗舞以外に、大きな盤をのせる盤子舞、メロンやスイカを載せる頂瓜舞、茶器のサマルルを載せるサマルル舞、それに本稿の主題である油灯舞、などが掲載されている。

油灯舞は碗に油を入れ、口縁部にこよりを立てて、それに火をつけたものを頭上に載せておどる踊である。日本から見ると、遠い新疆ウイグル自治区の踊であるが、この踊は日本とも関係がある。一九一一年、大谷探検隊の橋瑞超が現在の新疆ウイグル自治区ホータンを訪れた際、油を入れた皿を頭上に載せて踊る「油皿踊」をみて上手なことに驚き、見聞記を残しているからである<sup>③</sup>。その内容は後に述べるが、油灯舞と「油皿踊」が同じ芸能であり、現在でもホータンで油灯舞が行われていれば、大谷探検隊がみた「油皿踊」の系譜を追うことが可能となる。大谷探検隊の業績は、つねに考古学的、歴史的視点で語られるが、このように考えると芸能史的にも大変重要である。そのため、油灯舞と「油皿踊」が同じものかどうか、大谷探検隊が見た「油皿踊」の流れを汲む芸能が今も行われているかどうか、この二点を確認すべく現地調査を実施した。

一方用語について確認しておきたい。これまでは、中国で呼称されるとおり油灯舞としてきたが、所作からみれば日本でいう踊である。日本では、舞と踊を区別する。したがって、日本式に言えば油灯舞となるが、かえって混乱をまねくので、記述に際してはそのまま中国式を用いる。

本稿は、新疆ウイグル自治区で行われている油灯舞の調査報告だが、それとともに、大谷探検隊が見た「油皿踊」の追跡調査でもある。

## 1 新疆ウイグル自治区の概要

はじめに、新疆ウイグル自治区の位置と民族構成について確認しておく。新疆ウイグル自治区は、中国の最西部に位置し、面積は一六六万平方キロメートルと全中国の約六分の一をしめる。東はモンゴル、北はロシア、西はカザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、アフガニスタン、南はパキスタン、インドなど八つの国々と国境を接している。そうした地理的環境から、ここにはウイグル族をはじめ、漢族、モンゴル族、カザフ族、クルグズ族、タジク族、ウズベク族、回族など一三以上の民族が住む。二〇〇八年末現在、新疆ウイグル自治区の人口は約二一三二万人で、そのうちウイグル族は約九八三万人、漢族は約八三六万人、カザフ族は約一五一万人、回族は約九五万人、クルグズ族は約一九九万人などとなっており、ウイグル族が全体の四六%をしめている<sup>⑤</sup>。ウイグル族はイスラム教を信仰するトルコ系民族だが、新疆ウイグル自治区だけに居住しているのではなく、先にあげたカザフスタン、クルグズスタン、タジキスタンなど隣接する中央ユーラシア諸国にも居住している。それらの国々において、新疆ウイグル自治区と同じような芸能を伝承している。こうした点を踏まえると、本稿は正確には「新疆ウイグル自治区に住むウイグル族によって行われている油灯舞」に関する考察なのだが、煩雑になるので表題のとおりとした。

## 2 調査の経過

中国で伝承されている民俗芸能の概要をつかむには、中国民族民間舞踏集成編輯部編により、一九八八年から二〇〇〇年にかけて刊行された『中国民族民間舞踏集成』が便利である。この本は省、自治区ごとにまとめられており、そのうち新疆ウイグル自治区については、一九九八年に出版されている。また近年は、『中華舞踏志』編輯委員会編により『中華舞踏志』シリーズもだされており、こちらの新疆巻は二〇〇七年に出版されている<sup>⑥</sup>。

『中国民族民間舞踏集成 新疆巻』に掲載される「全自治区民族民間舞踏集成表」によれば、油灯舞は哈密地区の哈密市、伊吾県、巴里坤哈萨克自治県の一市二県、喀什地区の葉城県、和田地区の墨玉県と洛浦県の合計六カ所で行われている<sup>⑦</sup>。それらの位置については、図1を参照されたい。ただこの『中国民族民間舞踏集成 新疆巻』は一九九八年の出版である。本の刊行から一〇年以上経過しているため、現地調査を実施する前に、現在でも芸能が行われているかどうか確認しておく必要がある。そこで、新疆ウイグル自治区文化庁に芸能の所在確認を依頼した。すると、文化庁は本の記述をもとに、南疆の三地区二自治州、すなわち阿克苏地区、喀什地区、和田地区、克孜勒蘇柯爾克孜自治州、巴音郭楞蒙古自治州、哈密地区の各文体局に確認してくれた。

その結果、哈密と和田以外はすでに伝承が途絶えていたが、この2カ所では油灯舞を実見できるといふ。そこで、二〇一〇年八月に現地調査を実施した。

なお、これから本稿で用いる国名、民族名、主要都市名は、表1のようにならざるに慣用にしたがう。これら以外のものは原語の発音を正しく表記するようにつとめ、その後には適宜中国語表記を加えた。



図1 油灯舞伝承地

表1 地名比較表

日本での通称	ウイグル語発音	中国語表記
ウルムチ	ウルムチ	烏魯木齊
トルファン	トルパン	吐魯番
ハミ	コムル	哈密
アラテュルク	アラトウルク	伊吾
バルコル	バルクル	巴里坤
アクス	アクス	阿克蘇
クチャ	クチャ	庫車
カシユガル	カシユカル	喀什
カルギリク	カルギリク	葉城
ホータン	ホテン	和田
カラカシ	カラカシユ	墨玉
ロプ	ロプ	洛浦

(1) 『中国民族民間舞踏集成 新疆卷』の油灯舞

はじめに、『中国民族民間舞踏集成 新疆卷』に記される油灯舞<sup>⑧</sup>について確認しておこう。

この記述のもととなった話者は、ハミ市に住むエマツトジャン・ジェリリ（艾買江 吉力力）である。新疆ウイグル自治区では六カ所で伝承されているという油灯舞だが、この本に掲載される油灯舞は、あくまでハミのものであることを強調しておきたい。ここに記される油灯舞を以下のとおり各項目に分けて紹介する。

① 起源

油灯舞はハミが起源である。伝説によれば、祖先の弔いをする儀式が変化したものといわれている。

## ②分布

ハミ以外では、ホータンやクチャにも伝播している。芸能の内容は基本的に同じだが、あちらのものは灯芯が一本である。

## ③芸態

油灯舞は、男子一人で行う踊である。頭上に置く陶碗は直径約一二センチメートル、高さ約七センチメートルの平底で、中に油を入れ、口縁部に沿って綿花でできた九本の灯芯を立てる。両手には小さな木針を持つ。これは長さ約一五センチメートルで、一方は太く、もう一方は細くなっている。九本の灯心はかつて新疆に存在した九つの汗国を表している。踊るときは明かりを消し、サナム（型などを意識せず自由に踊る即興性の強い舞踊）の音楽に合わせて踊る。

踊の所作だが、足の運びは基本的にサナムと同じで、バネ仕掛けのように歩いたり、クロスステップを踏んだりする。両膝をつけて上半身を大きく左右に動かしたり（図2）、首を前後に動かししたりする。腕を水平に広げ、木針を持った手を音楽にあわせ、ぐるぐる回したりする。

## ④話者

エマツトジャン・ジェリリはウイグル族、一九四〇年生まれでハミ市



図2 ハミの油灯舞

に住む。幼いときから活発に活動してきた。当地ではマシユラップ（樂しみ、集うの意）があればほとんど彼を見つけることができる。彼はサナムと油灯舞が得意である。

## (2) 大谷探検隊がみた油皿踊

西本願寺は、大谷光瑞（二世法主）が中心となり、西域に三回探検隊を派遣している。そのうち橘瑞超は二回目と三回目に参加している。彼の三回目よきの探検記録が『中亜探検』で、大正元年（一九一三）に出版されている。これは橘瑞超が口述したものを元毎日新聞の記者関露香が筆記したものである。

橘瑞超は、一九一一年、現在の中国新疆ウイグル自治区ホータンを訪れた。地元の人々は大いに歓待してくれ、何度も彼らの宴会に招かれたという。そうしたお礼として、彼はこの地を去るにあたり返礼の宴を催した。そのとき地元の人々によっていろいろな芸能が行われたのだが、この本の中に現在の新疆ウイグル自治区の芸能文化を考察する上で興味深い記述がある。『中亜探検』三十五節「土民の油皿踊」の中から、該当部分を引用する。<sup>9)</sup>

一体この辺の人々は歌舞音曲に巧みであります、これはあなたが今日始まったということではなく、遠い昔からのことで、他の事物に比較して中々発達しているのです。即ち一絃琴を弾するもの、二絃琴を弾くもの、笛を吹くもの、太鼓を打つもの、皆これが男ばかりで、これに合わせて踊る者もまた髯の多い屈強な男子で、その舞いの手のいかにも優かに、いかにも軽そうに踊り狂うその形といたらまことにおかしなものであります。（略）時には頗る活発に踊り出すこともある。なおその踊り方にもいろいろあってあるいは

頭の上に油皿を載せ、それに火を点けてその火の消えないよう、油の溢れないように熾んに跳ね廻る踊もある。これらの踊は宴会に興を添えて多数来客の大満足するところとなり、和蘭中の大評判になったのであります。

ここに出てくる楽器をウイグル族の楽器に照らし合わせると、二絃琴はドタール、笛は横笛ならネイ、豎笛ならばスルネイかバリマン、太鼓はナグラとなる。太鼓については、タンバリン式のダブの可能性もある。一絃琴は現行の楽器に該当するものがない。こうした楽器が揃っていることから、このときの油皿踊にも何らかの伴奏があったと思われるが、これだけの記述ではこれらの楽器が油皿踊の伴奏を務めたかどうかも判然としない。油灯舞の芸態については詳しい記述がないためほとんどわからないが、頭上に油皿をのせ、それに点火して踊ることから先に見たハミの油灯舞と同様の芸能と考えてよいだろう。「熾んに跳ね廻る」という語句があることから、頭上に油灯を乗せていても動きの激しい踊であったことがわかる。

橘瑞超の『中重探検』のこうした記述だけでは、このときの芸態を復元するには不十分である。他の資料も調べるべきなのだが、大正十三年(一九二四)、彼が住む興善寺の火災により旅行日記などのほとんどを焼失してしまった。そのため、これ以上の詳しい内容がわからないのが残念である。

### (3) ハミの油灯舞

ハミの油灯舞は、二〇一〇年八月一九日、ハミ市内に新しく建設された哈密木卡姆传承中心(ハミムカーム传承センター)で実見した。これは去年完成したもので、ハミムカームの传承とともに研究、公開の中核施設

となっている。建物の入口には「哈密木卡姆传承中心」「哈密地区非物质文化遗产遺產保護中心」「哈密市非物质文化遗产遺產保護中心」「哈密東天山古伊州文化研究院」とあり、四つの目的がある建物であることを示している。今回、芸能を行ってくれたのはこの職員である。それまでは民間芸人(日本式に言えばアマチュア)であった人々が、この施設の開館に合わせ、二〇〇九年十一月一日から職業として芸能を行う、いわゆるプロになったものである。

はじめに、職員による油灯舞を簡単に記しておく。

頭上に油灯をのせ、両手にも油灯を持った男性が登場する。次に両手に油灯を持った四人の女性が登場する。男性は膝をついて両手を広げたり、回転して踊ったりしても油灯を落とさない。四人の女性が一列に並ぶ中、男性は中央に位置し、皆で大きな所作で踊った後、女性たちは膝をついて油灯をかざしながら男性の方に注目を集めるような所作をとる。それから男性を中心に、周囲を女性たちが輪になって踊り終了となる。

演者にこの踊の難しいところはどこかを尋ねると、油灯には火がついているので、やけどをしないよう、また落とさないように腕を回転させるところという。ただ、油灯は本物の油灯ではなく、ランプの形状をした電池式(図3)であった。そのため、やけどをする心配がないからである。緊張感がまるでなく、踊としての優雅さが優先されているように感じられた。

この芸能の復元経緯は、次のとおりである。

かつて、油灯舞は盛んに踊られていたが、文化大革命を機に踊られなくなった。以来忘れ去られ、四十〜五十年経過



図3 ハミムカームセンターの油灯(中央はスイッチ)

した。全新疆民族舞蹈総出現というイベント（開催年度不明）があったとき、かつて油灯舞という踊があったことがわかった。ただ、そうした踊の存在はわかっても、踊の復活には至らなかった。それが実現することとなったのは、筆者が文化庁に存在の有無を確認したことがきっかけで、外国人が注目するような芸能ならば、これを機に復活しようと思いついたらしい。

復活に際し、踊の概要は『中国民族民間舞蹈集成 新疆卷』に油灯舞の所作などが掲載されているのでわかったが、一連の動作となるとわからないことの方が多かった。エマツトジャン・ジェリリ（艾買江 吉力力）に尋ねるにも彼はすでに亡くなっていた。そこで、ハミ市文体局は油灯舞を踊ることができる人がいないならば、かつて踊を見たことがある人を探すことにした。しばらくすると、ハミ市五堡郷に今年百九歳になるディナラハン・ユウスブ（迪娜熱汗 玉蘇甫）というおばあさんがいることがわかった。彼女は油灯舞の所作を覚えていたので、エマツトジャン・ジェリリの残した記録を参考に振りをつけ、昔通りにできているかどうか確認してもらい、彼女から合格点を得たのだという。

また、調査時にハミ市文体局のセマツト（塞買提）主任から、かつて油灯舞に使用していたという油灯の写真をみせてもらった。これは直接撮影したものではなく、本などから複写したものであった。油灯の撮影年代は不明なのだが、同行してくれていた文化庁の王建新氏によれば、背景の樹木の種類と生育状況から考えて一九八〇年代前半に撮られたものではないかという。この写真から書き起こしたものが図4である。これから考えると、図2のように直接頭の上に

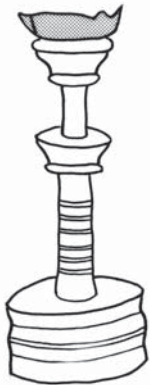


図4 ハミでかつて使用されていた油灯

碗をおいたのではなく、円柱状の器具を頭上に置き、その頂部に皿を置くやり方もあったことがわかる。これと同じようなものを、カシュガルのエイティガル寺院に隣接す

る職人街の古道具屋でも見かけた。油灯単体での写真撮影は許可されなかったが、人物と一緒に撮影していいという。不思議な話だが、そうして撮影したものが図5である。大きさや底部の形状はことなるが、このようなものもあったことがわかる。



図5 カシュガルで見つけた油灯

#### (4) カラカシの油灯舞

二〇一〇年八月二十日、ホータン地区カラカシ（墨玉）県にある其娜民俗風情園で油灯舞を実見した。はじめに県の歌舞団による復元芸能があり、その後同県扎瓦郷庫坎村に住むママツト・トホテイ（買買提 托合提）氏による油灯舞が行われた。

はじめに、歌舞団の踊を簡単に紹介する。女性一六人が一列四人で四列に並び、その中央に一人の女性が位置する（図6）。いずれも頭上には油灯をのせている。その隊列のままひとしきり踊って退場す



図6 墨玉県歌舞団による油灯舞

次にママトト・トホテイ氏の油灯舞である。

ウイグルの油灯舞

番号	名称	番号	名称
第一番	ラック	第七番	エジヤム
第二番	チャビアット	第八番	ウシヤーク
第三番	セガー	第九番	バヤット
第四番	チャリガー	第一〇番	ナヴァー
第五番	パンジガー	第一一番	ムシヤービラク
第六番	オザール	第一二番	イラック

表2 12ムカームの名称

これは後に紹介するママトト・トホテイ氏の踊をもとに創作したものと、大きな動きを重視した早いテンポの踊で、油灯は単なる小道具となっていた。油灯はランプの形状をしたもので、図7のとおり中に電池が入っている。そのためか、踊の際には持つていることをほとんど意識していないようで、この点はハミの踊以上であった。

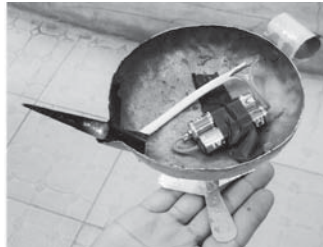


図7 墨玉県歌舞団の油灯

ると、次に、男性一〇人が一列二人、五列に並んで登場する。体を左右に振ったり、前後に位置をかわったりと大きな所作をとる。そこに、女性一〇人が加わり、一緒になって輪になって踊る。さらに女性の人数が六人増え、男性は外側に、女性は内側で踊る。そこに一人の女性が頭上に油灯をのせて登場し中央に位置とる。毛の帽子をかぶった二人の男性も加わって早いリズムにあわせて踊るとクライマックスで、それで終了となる。

今回の上演では、音楽は十二ムカームの第二番チャビアットを用い、場面はマシユラップ（樂しみ）という想定で行われた。楽器構成は、ダブー、ギジエク二、ラワップ二、カールン一である。十二ムカームの第二番チャビアットムカームの最後の段、マシユラップの演奏が始まると、油灯を載せたママトト氏が舞台上に登場する。チャビアットの音楽に合わせて舞台を動き回りながら手踊りをし、ときに軽快にステップを踏む。頭上では勢いよく火が燃えている。しばらくすると、舞台をおりて、会場を自在に動き回る。それから再び舞台に戻り、足取りも軽やかに踊る（図8）。移動距離は長い、体の上下動はほとんどない。『中国民族民間舞踏集成 新疆卷』に載せるように、首を動かしたり、膝をつく所作はなく、手に何も持たない。終わると、頭上の油灯を手に取り一礼して全て終了となる。演技時間は約五分であった。



図8 ママトト氏による油灯舞

実演の後、ママトト氏から聞き取り調査を行った。今回の伴奏には十二ムカームが用いられたが、氏によると現在流行しているアップテンポな音楽では難しいものの、十二ムカームやウイグル族の民謡なら何でも油灯舞を踊ることができるとのことであった。

ママット氏の油灯は、碗ではなく図9のような缶を用いていた。灯芯は一本である。このような缶を使うようになったのは一九九〇年頃からで、それまで使用していた磁器製の碗が割れてしまい、それと同じものがなかったため割れない缶にしたという。磁器製の碗を使っていたときは、灯芯のこよりは一本のこともあり、複数本のこともあったが、最大で五本立てたこともあるという。



図9 ママット氏の油灯

ママット・トホティ氏は、一九三七年生まれで、油灯舞は一〇歳のときに父親から習った。最初は小さな碗を頭上に置いて踊り、落とさなくなったらその中に水を入れて練習した。これができるようになるともう大丈夫で、実際に油を入れて踊った。踊ると楽しいので、一年もかからず修得した。祖父は油灯舞の名人で、頭上にひょうたんを載せ、その上に油灯をのせて踊ることができた。そのため自治区政府から奨励金をもらったこともある。

この踊の難しいところは、やはり油灯を落とさないようにすることです。これまでに落として上半身をやけどをしたこともあるという。油灯舞は、結婚式やめでたいときに踊るもので、県などの公的な機関や村人のお祝いなどに依頼があれば出かけていく。外国人の前で踊ったのは、今回が初めてである。ハミのように祖先の弔いなどとはいっていない。

ママット氏に油灯舞の伝承状況、後継者の養成についても尋ねた。ママット氏には弟がいるが、弟は油灯舞を踊ることができない。それは、父親が息子たちの中でも踊が好きな自分だけに教えたからである。男だから必ず踊ることができなければならないということもないので、子供たちに無理強いはしなかった。長男だけに教えるということもない。ママット氏も息子に教えたのだが、彼は交通事故でなくなってしまった。

孫はいるものの、みな女の子なので教えていない。その理由を尋ねると、油灯舞は男の踊だから教えないのだという。このままでは油灯舞が絶えてしまうので、近所の青年に教えたいが、誰も踊りたがらないので後継者はいない。油灯舞を踊ることのできる人は、自分以外にも一人いたが、どちらも自分より年上だったので亡くなってしまった。結局現在踊ることができるのはカラカシでは自分だけという状況である。芸態について尋ねると、「油灯舞」という同じ踊が広く分布しているのではなくて、油灯舞は村ごとに特色のあるものだ、という。つまり油灯を用いることは同じでも、それぞれの村の踊自慢が見栄えのいいようにかえているので村ごとに違うということらしい。

頭上にものを載せて踊る他の踊、スイカを載せる頂瓜舞や茶碗を重ねてのせる頂碗舞、大きな盤を載せる盤子舞も踊るのか尋ねると、それらの踊は踊らないという。その理由だが、難しい油灯舞ができる者は、それら簡単な踊はしないということであった。

最後に、ママット氏に大谷探検隊のことも尋ねた。氏によれば、父や祖父から日本人がカラカシにきたこと、また日本人に油灯舞を踊って見せたことなどは聞いたことがないという。ママット氏は一九三七年生まれである。彼の年齢から父の年齢を推定すると、橋瑞超らがホータンに来た一九一一年は、だいたい彼の父が生まれた頃と思われる。したがって、大谷探検隊がカラカシに来ていたならば、もしくは油灯舞の名人であった祖父が出かけて行って踊っていたならば、何らかのことを子供や孫に伝えたであろう。そう考えると、大谷探検隊の橋瑞超が見た油皿踊はカラカシのものとは関係がない可能性が高い。では、それが現在のホータン市の踊なのか、それとも『中国民族民間舞蹈集成 新疆卷』に載っていたロブ県のかは今後の課題である。



## おわりに

本稿では、まず第一に新疆ウイグル自治区に伝承されている油灯舞の実態を把握することを目的とした。次に、ホータン地区カラカシに在住する油灯舞の伝承者、ママット・トホテイ氏に実際に踊ってもらい、映像や写真で記録を作成した。その後、聞き取り調査をして大谷探検隊との関連も探ってきた。

最後に、くり返しになるが、本稿で明らかにし得たことを簡潔にまとめて終わりとしたい。

油灯舞は『中国民族民間舞踏集成 新疆卷』によれば、新疆ウイグル自治区内の六箇所で伝承されるということであった。調査の結果、民俗芸能としてはホータン地区カラカシのママット氏以外には伝承者がいないことがわかった。

文献に記されるハミの油灯舞とカラカシのそれとを比較すると、頭上に油灯を置くことは共通するものの、芸態は大きく異なっていた。広い新疆ウイグル自治区ゆえ当然差違はあらわれるのだが、ママット氏によれば本来は村ごとと異なるということなので、そうしたあり方は芸能の持つ本質と関係があるのであろう。

橋瑞超一行がホータンでみた油灯舞とカラカシに住むママット氏が伝承する油灯舞とは直接的には結びつかない。橋瑞超が訪れた町は現在のホータン市の中心部と考えるのが妥当であり、市内中心部からおよそ二〇km離れたカラカシまで行って返礼の宴会をしたとは考えられない。名人といわれた祖父が呼ばれて踊った形跡もないので、ママット氏が伝承する踊とは直接関係がないと考えられる。百年前のことではあるが、現地での聞き取り調査はまだ可能であり、「油皿踊」の実態のさらなる解明は今後の課題となっている。

## 注

- ① 平成十八(二十年)度科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「中国新疆ウイグル族において継承し展開する合奏音楽「ムカム」の音楽様式研究」で、研究代表者は創造学園大学の樋口昭教授である。
- ② 中国民族民間舞踏集成編輯部編一九九八
- ③ 橋瑞超述、関露香編一九二二
- ④ 中国民族民間舞踏集成編輯部編一九九八、一六九頁では同じ踊としている。
- ⑤ 羅思洪、亢瑞琴責任編輯二〇一〇
- ⑥ 《中華舞踏志》編輯委員会編二〇〇七『中華舞踏志・新疆卷』学林出版社

⑦ 中国民族民間舞踏集成編輯部編一九九八、二二〇～二二三頁

⑧ 中国民族民間舞踏集成編輯部編一九九八、一六九～一七五頁

⑨ 橋瑞超一九二二、一三三～一三四頁。なおこの『中亜探検』は、大谷家の依頼で上原芳太郎が編纂した『新西域記 下巻』(一九三七、有光社)にも収録されている。近年では一九八九年に中央公論社から文庫版が出ており、文庫版では九九～一〇一頁である。引用に際しては文庫版を使用した。

⑩ 橋瑞超一九二二の一三二頁に「和蘭に滞在中私は支那官憲を始め、外国人或は土地の富豪などから頗る優待され、屢々彼等の宴会にも招かれまして」とあることからすると、やはり現在の市内中心部であろう。

## 図版出典

- 図1 筆者作図  
 図2 中国民族民間舞踏集成編輯部編一九九八、一七三頁、図八  
 図3 筆者撮影  
 図4 筆者作図  
 図5～8 筆者撮影

## 参考文献

上原芳太郎編纂一九三七『新西域記 下巻』有光社

橋瑞超述、関露香編一九二二『中亜探検』博文館

《中華舞踏志》編輯委員会編二〇〇七『中華舞踏志・新疆卷』学林出版社

中国民族民間舞踏集成編輯部編一九九八『中国民族民間舞踏集成 新疆卷』

中国 ISBN 中心

羅思洪、亢瑞琴責任編輯二〇一〇『数字新疆』新疆維吾爾自治区对外文化交流協會、香港誠諾文化出版社

謝辞

現地調査を実施するに当たって、新疆維吾爾自治区人民政府の劉華副秘書長と新疆維吾爾自治区文化庁对外文化連絡処のアニジャン・カイクム（艾尼

江・克依木）処長には多くの点で高配いただきました。現地調査では、文化庁の王建新、湯文兩氏とガイドの董秋凡氏に大変お世話になりました。また新疆芸術学院副教授ウメル・ママトト氏と息子ニジャット・ウメル氏には本稿を作成する上で多くのご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

本稿は、財団法人平和中島財団の二〇一〇年度アジア地域重点学術研究助成「新疆ウイグル自治区のムカームにおける散楽系芸能の調査研究」の成果の一部である。

（関西外国語大学准教授）